新宗連スローガン
信教の自由を守ろう
信仰心を広めよう
宗教協力を進めよう
世界の平和に貢献しよう

新宗教新聞

2019年（令和元年）
9月26日
第1118号

発行所
新日本宗教団体連合会
（略称 新宗連）
〒151-0053
東京都渋谷区代々木5丁目57番10号
電話（03）3468－5551（代表）
（03）3468－5588（編集）
大阪事務所 〒550-0006
大阪市西区江之子島1丁目8番21号111
電話（06）6443－7178

第82回拡大宗法研
修行・奉仕と労働の両立を
具体的事例を通して対応を考える

宗教法人研究会

新日本宗教団体連合（新宗連、岡田光央理事長）の宗教法人研究会（宗法研、仙波達治座長）は9月19日午後2時から、東京都杉並区の佼成図書館視聴覚室で、第82回拡大宗法研を開催した。「修行・奉仕と労働の両立を考える―労働基準法の改正を受けて」をテーマに、弁護士と社会保険労務士の2氏が講演。政府が進める「働き方改革」の流れの中、労働基準法が10年ぶりに改正され、今年4月から順次施行されている。宗教法人運営上の諸課題の調査研究を進めている宗法研では、近年継続して宗教法人の「労働」問題に取り組んできた。加盟教団の担当者ら多数が参加し、関心の高さがうかがえた。

本間 久雄氏

永田 一美氏

宗教団体とりわけ新宗教の職員は、一信者でもある場合がほとんどで、もともと修行・奉仕が起源であるため、社会一般の慣例となじまない面が少なくない。学習会では、労働関係法と法改正の一般的理解を深めるとともに、宗教団体特有の課題を学んだ。

仙波達治座長は開会あいさつで「私どもは修行・奉仕という意識で奉職したが、社会の状況は変化している。宗教団体の聖（ひじり）の側面を守るために、俗なる法人運営の課題をともに考えたい」と趣旨を説明した。

一人目の講師は、弁護士の本間久雄氏。日蓮宗の僧籍をもち、近年、宗教法人裁判の判例集や法人実務書式集などの著書を出版している。

本間氏は「労働紛争解決システムと裁判例にみる宗教法人の労働紛争」をテーマに講演。まず、宗教法人の職員の場合、労働関係法（労働基準法、労働契約法、労働組合法、最低賃金法など）が適用されるかどうかがポイントと述べた。

「労働者」と使用者（雇用者）との争いにおいては、労働者は労働関係法によって強い権利を認められている。例えば、「解雇」は合理的理由と、社会通念上相当と認められない限り無効であり、労働時間、賃金払いの方法などが細かく規定されている。

それでは「労働者」とは何かというと、使用者に使用されるものであり、「使用従属性」があるか否かによって決まる。

本間氏は「宗教法人の場合、そこで活動している者が修行などの目的で務めている場合には、労働者として扱うことは、信教の自由の観点で問題」と述べ、1952（昭和27）年の労働省通達（『栞』参照）を紹介。「古いものだが、現在でもこの通達に基づいて判断されている」として、近年の裁判例を紹介しながら、「上からの命令（指揮命令）であって、自発的に行っていなければ、信教の自由は関係がないという判断」と解説した。

労働紛争の実際についての説明では、「団体交渉」について「労働者の法的権利のため拒否してはいけない」と注意を喚起。特に近年は個人加盟型のユニオン（労働組合）があり、労働組合から交渉があった場合、聞き覚えのない団体でも、まずは弁護士などの専門家に相談することを勧めた。

最後に給与の発生しない奉仕の場合であっても、安全配慮義務があるとして、炎天下の作業などの際の配慮、教団施設の老朽化対策に加え、各種損害保険の検討も提案した。

トラブルを未然に防ぐには

続いて、社会保険労務士の永田一美氏が「働き方改革」をテーマに講演。永田氏は「働き方改革」の目的は長時間労働の是正と過労死の防止であると述べた。

今年度の主な改正では、年次有給休暇の年5日間消化と労働時間の把握が義務付けられた（罰則あり）ことを説明。有給休暇の付与の仕方、客観的に労働時間を把握する方法を事例に即して詳細に解説した。

加えて、「時間外労働」について、一般的な観点から上限規制や割増賃金率を紹介。また、最新の最低賃金を示して、非常勤、アルバイトも含め、賃金計算、残業代計算を再度確認するようアドバイスした。

永田氏は自身が関わった宗教法人の事例から、使用者と雇用者間で合意の上であったとしても、労働基準監督署が調査に入れば、不備の点を指摘されるとしながらも、「コミュニケーションをしっかりとって、トラブルを未然に防ぐこと、退職する場合も円満に」と語り、「不満は聞いてあげて〝頑張ってくれてありがとう〟と感謝の言葉をかけてあげてください」と述べた。

講演を受けての質疑応答では、参加者から「何時から何時までは労働者で、以降は奉仕という区分けはできないのか」「教団職員の活動がすべて労働として賃金が発生するようになれば、本人の奉仕の精神や努力まで否定するようなことにならないか」などの質問、意見が出された。

講師の2氏は、宗教団体の実情に理解を示しつつ、個別的な判断になるが労働者性が広く認定される傾向にあること、勤務時間外の宗教活動への参加はなるべく強制でなく自発的なものとすることが望ましいと述べた。

拡大宗法研に先立ち幹事会

拡大宗法研前の午後零時半からは、宗法研幹事会が開催され、宗教法人運営上の諸課題について、情報交換が行われた。

多様な質問、意見が出され、関心の高さがうかがえた

第10回世界宗教者平和会議（WCRP／RfP）
慈しみの実践 共通の未来へ向け
125カ国の宗教者らが議論を重ねる

ドイツ・リンダウ

第10回世界宗教者平和会議（WCRP／RfP）が8月20から23日までドイツ。リンダウで「慈しみの実践：共通の未来のために―つながりあういのち」の大会テーマのもと、開催された。世界125カ国の宗教者900人はじめ1千人以上が参加。日本からはWCRP日本委員会の庭野日鑛会長と植松誠理事長はじめ約40人の正式代表やスタッフらが参加した。

WCRP／RfPは、世界の諸宗教指導者が一堂に集い、現代の諸課題に道徳的合意を築くと共に、WCRP／RfPネットワーク内外の諸宗教活動を推進する行動思考型の大会。第1回が1970（昭和45）年、京都市で開催されて以降、ベルギーとアメリカ、ケニア、バチカン・イタリア、ヨルダン、オーストラリアなどで開催され、今回第10回を迎えた。

今回は大会テーマに沿い、①積極的平和における諸宗教のビジョン②紛争やテロ等の紛争を予防し変容する③公正で調和のある社会を促進する④持続可能な総合的人間開発を促進する⑤地球を守る―の5分科会、また特別セッションや全体会議、地域会議が連日開かれ、熱い議論を重ねた。

最終日23日の閉会式では、大会を総括する大会宣言文「リンダウ宣言」が発表された。同宣言では大会テーマ、暴力的紛争の防止と変容、公正で調和のある社会の促進、持続可能で不可欠な人間開発と地球保護―の4項目のまとめと、これに即した9点の共通行動への呼びかけが示された。

WCRP日本委員会は大会へ向け、事前に「日本からの提言」を発表していたが、大会宣言ではその内容がほぼ反映されたという。

また、閉会式では国際委員会の人事も発表され、新事務総長には国連で要職を務めるアッザ・カラム氏（50）が就任した。初の女性、初のイスラームの事務総長となる。就任あいさつでカラム氏は貧困問題、気候変動、ジェンダー問題、平和構築、教育―の5点を重要課題として提起した。

また、分科会や区別セッションを通して、「平和構築者としての女性」が重要なキーワードとして多用された。（3面に大会報告、大会宣言文）

閉会式―大会宣言文を読み上げる各国の代表者（写真提供＝WCRP日本委）

《今号の紙面から》
〈1・3面〉 第10回世界宗教者平和会議開催―ドイツで開催した、諸宗教指導者らが現代の諸課題に取り組んだ大会の詳報。
〈4面〉 寄稿「私たちの苦悩―作家たちはどう向き合っているか」―文芸ジャーナリスト、内藤麻里子氏が現代人の苦悩を作家がいかに描いているかを読み解く。

酒々抄
そうだリンカーンパーク行こう

毎週一人で旅に出る。フーテンの寅さんのように。前回は高知の旅、そして今回は米国サンフランシスコの旅、しかも団体旅行。羽田から空路9時間、日付変更線を越えてサンフランシスコへ。

エコノミークラスの座席の狭さは、「エコノミークラス症候群」という言葉が生まれるのも頷ける。

サンフランシスコ湾、ゴールデンゲートブリッジを望むリンカーンパークの園内に「大自然」という神石が建立されている。

現地6月9日（日）、神石の前において「大自然神石35年祭」が行われた。6月のサンフランシスコの青空とゴールデンゲートブリッジの絶景、すがすがしい行事となった。

「大自然」の揮毫は豊道春海（しゅんかい）師。

新宗連理事長の崇教真光三代教え主・岡田光央先生は、書家手島泰六の名を持つ。我が国を代表する現代書家の一人として、国内、海外での書展多数、数々の賞を受賞され、文筆家としてもご活躍である。その著書『日本の書』（産経新聞出版）の中に、「豊道春海の重厚」という頁があるので、一部ご紹介させていただく。

―前略― 豊道春海（1878～1970年）は、栃木県大田原市の出身で、13人兄弟の三男として生まれた。4歳のとき母が急逝したことから、母方の叔父である天台僧の「守慶」がいた東京・春性院に預けられた。2年後、守慶の配慮で茨城県・妙行寺で厳しい修行に入る。読経と勉学に励んで13歳で得度。「慶中（けいちゅう）」と号した。明治23（1890）年に浅草・華徳院の住職となった春海は、翌年から西川春洞に書を学ぶところとなったのである。戦後、壊滅に瀕した書壇の復興にも努めた春海は、日展に五科（書部門）を設置することに尽力。書壇の大御所として君臨した。春海は一門の育成に力を注ぐ一方で、他流の書家にも厚く接して大僧正としての役割を怠らなかった。―後略―

昭和45（1970）年3月、豊道春海師の自宅において、額装された「大自然」前で春海師と修養団捧誠会教祖出居清太郎が並んで椅子に座り、写真に納まっている。二人の「志」は今も脈々と生きている。

和石ツーリズムの旅は続く。光を観るために。（出居徳久・修養団捧誠会総裁）

フランシスコ教皇
11月に来日
東京・広島・長崎を訪問

ローマ教皇庁（バチカン）はこのほど、フランシスコ教皇が11月23から26日まで来日することを正式に発表した。日本カトリック司教協議会が9月13日にこの正式発表をニュースリリースで報告したもので、ローマ教皇の来日は1981（昭和56）年のヨハネ・パウロ二世以来38年ぶり、二度目となる。教皇は東京と長崎、広島を訪問。旅程の詳細は今後、発表される。

来日のテーマは「すべてのいのちを守るため―PROTECT ALL LIFE」。教皇が2015年に発表した、重要度の高い教書である回勅『ラウダート・シ』の巻末に収められている「被造物とともに捧げるキリスト者の祈り」から取られたものという。

フランシスコ教皇は1936年、アルゼンチン・ブエノスアイレス生まれ。同国イエズス会の管区長、神学院長などを務めた後、ブエノスアイレス大司教に。2013年3月のコンクラーベ（教皇選挙）で、第266代教皇に選出された。イエズス会士、またラテンアメリカ出身者として初の教皇となった。

教皇は2014年7月の一般謁見の講話の中で、1945年に長崎で撮影された「焼き場に立つ少年」の写真頒布を指示している。

【訂 正】前号1面「全国戦没者追悼式」の記事中、3段目「数多くの人々と」に、「再び戦争の惨禍が再び繰り返されないこと」を「再び戦争の惨禍が繰り返されぬこと」と訂正しお詫びいたします。

労働省通達 宗教法人に関する通達（昭和27年2月5日基発49号）。「宗教尊重の精神に基づき宗教関係、事業の特殊性を十分考慮する」との前提のもと、給与を受けない奉仕者は労働者ではないが「労働契約に基づき、労務を提供し、賃金を受ける者」は労働者と確認。宗教上の奉仕や修行であるという信念があるとしても「一般の労働者と同様の勤務に服し賃金を受けている者」については「個々の事例について実情に即して判断する」と示されており、争点になることが多い。（1面）

宗教をめぐるさまざまな問題のご相談窓口
宗教もしもし相談室
03 3466-9900
受付●月曜→金曜／正午→午後4時
公益財団法人 新日本宗教団体連合会

解脱会伝記編纂委員会編
新版 解脱金剛伝 全3巻
A5判 上製函装 定価3000円（税込み）
世相善導、人心救済への道筋を説かれた解脱会会祖・解脱金剛（岡野聖憲）の生涯を全1549頁、3巻に収めた。会祖亡き後、その人格に触れて自らの内に深い帰依心を培い、世のために生きるための学びの土台となる書。第1巻＝生誕から事業の失敗、大成を経て宗教の世界に目覚めていく前半生を描く。第2巻＝昭和4年に立教して以来、人心救済の道一筋に生き、教えの土台を完成するまでの事績を辿る。第3巻＝戦時下の厳しい時代の中で縦横無尽に教えを説き、救済活動を展開し、遷化されるまでの歩みを記す。
解脱会
〒160-0007 東京都新宿区荒木町4番地
TEL 03-3353-2191(代表) Fax 03-3353-3055

清文社
宗教法人の税務調査対応ハンドブック〔宗教法人税制と法制の解説を含めて〕
石村耕治 編
A5判3780円
平成25年からの新・税務調査手続にも対応！
宗教法人と税務調査についての基礎知識を中心に整理し、コンパクトに解説した、実務家・宗教関係者必携の一冊。
公益財団法人 日本宗教連盟推薦！
〒101-0047 千代田区内神田1-6-6
☎03(6273)7946 FAX03(3518)0299
http://www.skattsei.co.jp〈価格税込〉

芸術生活社【芸生文庫】
高齢期を快く生きるための“人生の道しるべ”
御木徳近著 パーフェクト リバティー教団第二代教祖が、宗教家として悟りと長い人生経験、多くの人との出会いから、高齢期を心豊かに暮らすための新しい生き方を提唱する。■定価700円（税込）
老春誦歌（ろうしゅんおうか） 長生きの秘訣
〒150-0047東京都渋谷区神山町16-1
電話03-3469-1153 FAX03-3465-6867

南雲堂
美容と健康寿命の秘策！
認知症予防★お口の体操
『みんな笑顔、みんな元気！』DVD
監修・作詞：太田哲二 作曲：森重恭典／歌・実演：恵中瞳
（体操解説・歌詞収録のブックレット付）
定価（本体2000円＋税）
●収録内容（歌と体操の実演）
▣アッカンベー体操／舌の動きや首を回して、筋肉を活性化させて、リンパの流れを良くする。▣パタカラ体操／魔法の言葉『パ・タ・カ・ラ』を使って口を大きく動かして脳に刺激を与え、認知症予防！ ▣ラップ・ラップ体操／早口言葉や落語の寿限無をラップのメロディにのせて歌うことで手・眼・口・全身の運動機能を向上させる。
〒162-0801 東京都新宿区山吹町361
☎03-3268-2311 FAX 03-3260-5425
http://www.nanun-do.co.jp/

佼成出版社
「宗教者の役割」「信仰の本質」を問う異色の評伝
〈大逆事件〉と禅僧内山愚童の抵抗
眞田芳憲
四六判／240頁 本体2000円＋税
日本近代史における最大の思想弾圧「大逆事件」に連座し、刑死した禅僧・内山愚童（1874～1911年）。社会主義者、無政府主義者としてこれまで語られがちであった愚童の思想と行動を、本書は仏教者としての側面から仔細に検証。その知られざる実像を明らかにする。
〒166-8535 東京都杉並区和田2-7-1
☎03(5385)2323 FAX03(5385)2334
http://www.kosei-shuppan.co.jp/

白馬社
合掌ができない子どもたち
浄土真宗本願寺派福賢寺住職 三上章道
四六判 定価1260円
『本願寺新報』の編集長を二十年に亘って務めてきた著者が、合掌ができない子どもたちとの出会いを契機に、戦後の日本社会が戦慄すべき「薄縁社会」となったプロセスを追い、その原因が宗教心の喪失にあることを解き明かす。そして新たに現出した「原発問題」にも、同根の原因があることを洞察していく。日本人の心の問題にするどく迫り、根本的解決への提言をまとめた必読書。
〒612-8469 京都市伏見区中島河原田町28-106
TEL 075(611)7855 FAX 075(603)6752
http://www.hakubasha.co.jp 価格税込

ハーベスト社
東日本大震災後の宗教とコミュニティ
星野英紀・弓山達也編 本体価格7200円＋税
東日本大震災後の福島県いわき市と相双地域のコミュニティの再建における宗教の役割（避難場所としての宗教施設、宗教教団や宗教者の動向など）を解明する
療術から宗教へ
世界救世教の教団組織論的研究
隈元正樹著 本体価格3000円＋税
西東京市向台町2-11-5
Fax042-467-8661 TEL042-467-6441

緊急出版 カトリック大阪教区神父 西山俊彦
平和憲法が平和への道、改憲は戦争への道
―わたしたちが核戦争の加害者とならないために―
世が平和ボケにあろうとも、「時すでに遅し」と後悔しないために、平和憲法の真価を見直す素養まで捨てるわけにはいかない。
●1400円＋税 四六判並製
248頁 ISBN 978-4-286-19691-6
文芸社
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
☎03-5369-2299 FAX.03-5369-3066
https://www.bungeisha.co.jp
書籍のご注文はお近くの書店またはブックサービス☎0120-29-9625、ネット書店まで

同推協

第30回人権啓発基礎講座
ネット上の差別を考える
部落差別、マイノリティの観点から講義

新宗連同和推進連絡協議会（同推協、大滝晃史代表幹事）は9月4、5日、大阪市の立正佼成会大阪普門館で「第30回人権啓発基礎講座」を開催した。

4日午後1時半に開会。主催者を代表して、小池繁昭幹事があいさつ。開催趣旨説明の後、講座Ⅰとして「部落問題の今」をテーマに、教育コーディネーターの武田緑氏が講演した。

部落差別について「歴史上の話」「それは何？」「古い考え」「今時ナンセンス」といった大学生らの声を紹介。部落問題への認識そのものが低下傾向にある現状に触れた上で、「土地」「結婚」「就職」に関わる差別をはじめ、ネット上の偏見に満ちた投稿やヘイトスピーチなど、差別事象の実態を解説した。

武田氏を講師に、情報を分類するワークに取り組む

続いて一つの情報（文章）から「事実」と「意見」や「印象」を分類するワークを実施。「事実」と思っていることの中には①正確な情報②誤った思い込み③意図的な嘘④自身で直接見聞きしたことか誰かに聞いたことか―など、「事実らしき」情報の発信源や十分な根拠の有無といった信憑性チェックの重要性を説いた。

そして差別の加害者にならないためには、見聞きした情報を「まだ分からない」と判断し一旦保留する姿勢が大切と述べ、自身の幼少期には「差別は差別する人と社会の問題」と教えられたことを述懐した。

また、差別は世間が「みなす」か否かが大きく影響していることを伝え、差別問題を理解しながらも周囲の雰囲気を察知し、自身に被るリスクを避けるため、あえて逆流を歩まない選択をする傾向があり、「心がけ」だけではなかなか進展しない現状を解説した。

娘の結婚相手が部落出身という理由で結婚を反対したある母親が、「本当に部落差別なんて誰がするのでしょう」と真剣に発言したエピソードを紹介し、「個人と社会（世間）は相互に影響し合っているが、社会に適応して行動を選びとることで、問題は維持されてしまう」と述べた。

武田氏は、人間には一人ひとりに配慮しようという思いやりの心も差別心も内在していることを確認した上で、時代状況における統治や制度の問題、教育の役割や社会運動、法整備の変遷など、差別には複合的要因があることを説いた。

「マイノリティが生きやすい社会づくり」をテーマにした講座Ⅱでは、国籍や趣味、性的指向など、表明しづらいアイデンティティを持つマイノリティの不可視化について考えるワークを実施した。

2日目の講座Ⅲでは「ネット上の差別の現状にどう立ち向かうか」をテーマに、公益財団法人反差別・人権研究所常務理事の松村元樹氏が講師を務めた。

また、生活におけるセーフティーネットとしても機能していると述べ、例えば中東では主食となるナツメヤシが無料で常に用意されていたり、喜捨（寄付金）もモスクのものではなく、「神のもの」という意識があるため、貧しく困っている人が自由に持っていくことが可能になっていたり、心身の「避難所」としてのモスクの在り方を語った。

そして、皆で礼拝することや食事をすること、皆と分かち合うことをイスラームでは重視し、個人主義的ではないと説明。

他方で「信教の自由」にも触れ、幼い頃から子どもをモスクには連れてくるが、信仰を強制せず、親が礼拝している姿など、「親が素晴らしいと思っているものを見せる」ことが重要だと話した。

さらに、日本ではイスラームへの偏見が強いことに触れた上で、アラビア数字やカメラの原理など、イスラーム文化発祥のものを挙げ、「イスラームは砂漠の、野蛮な宗教ではない。（偏見のない）イスラームを発見してほしい」と訴えた。

下山氏（手前）が詳しく説明

この後、参加者は手や顔、足を洗う「小浄」（ウドゥ、礼拝前の禊）を済ませた上で、イスラームの礼拝に参列した。

「部落って何？」をテーマにした「W（woman）の悲喜劇」というAbemaTVの番組放送後、某ネットサイトのトップニュースで同放送が紹介されたが、5千件を超えるコメントは悪意のあるものばかりだったという事件を紹介。

インターネット上だけでは解決できない要因の一つに社会的多数派、権力を持つ人々（マジョリティ）の動向があることを指摘。差別の根本的解決にはマジョリティの在り様が重要と訴え、マイノリティに比べ有利で優位な状態にあるマジョリティであることの自覚の欠如が、差別を生み出す社会を結果的に容認していることを解説した。

松村氏は、自己が持つ属性の有利さを自覚した上で、マイノリティが置かれた状態をマジョリティに置き換えて考える視点をはじめ、「マイノリティの生きづらさ、不安を知ること」「何もしないことは差別への加担になること」「マイノリティに問題解決の責任を負わせないこと」など、差別に加担したり、容認したりしない生き方を確立するための具体的な視点や方法を提示した。

閉会あいさつで森田健佑幹事は「時代は変化しているが、差別の実態は変わっていない」「差別する側の問題だけでなくそれを見過ごすことが、差別を容認していることになる」「日々祈りを捧げる際に反省を繰り返し、自己と向き合っていきましょう」と結んだ。

教化活動懇談会―長崎県協が実施

全国で展開している教化活動懇談会。長崎県協議会は9月8日、長崎県諫早市の立正佼成会諫早教会で「一人ひとりが信仰を深め、多くの人々に信仰心をひろめていく」をテーマに実施した。

参加教団の話を聞き、「信仰によって救われた喜びを自覚」することをねらいとして、パーフェクトリバティー教団（PL）と立正佼成会から教会長ら2人ずつ、計4人が講話。その後、参加者は10のグループに分かれ、グループ討議を行った。

講話の後、グループ討議を行う

参加者からは「教団は違っていても、教えて頂いていることには共通点が多く、その願いは一緒だと気付いた」「信仰心を広めるためにはまず、自分がありがたいと思う心を持ち、温かい思いやりの心で布教させていただきたい」などの感想が述べられた。

新宗連 総支部協議会

イスラーム理解 深める
東京ジャーミイを訪れ研修会

首都圏

首都圏総支部（本間雅弘会長）は9月18日午後2時から、東京・代々木の東京ジャーミイ・トルコ文化センターで「平成31年度研修会」を開催した。

研修会は首都圏総支部が毎年企画しているもので、「信教の自由」「政教分離」を考えることをテーマとしている。今年はイスラームのモスク（礼拝堂）である東京ジャーミイを訪れ、イスラームへの理解を深めるとともに、「信教の自由」についてあらためて考えることをねらいとした。

はじめに、同文化センター勤務の下山茂氏から説明を受け、モスクの来歴やイスラームの基本的な考えなどを聞いた。その中で下山氏は、モスクは山の上などではなく、常に生活の中心に建設されると話し、社会の荒波から避難する港のような「心の避難所」と説明。

松緑神道大和山を訪問
聖地を視察し研修、水行体験も

東京

東京都協議会（髙橋秀明議長）は8月27、28日、平成31年度教団訪問研修として、青森県平内町の松緑神道大和山（田澤清喜教主）を訪問した。

27日午後1時過ぎに松緑神道大和山本部に到着した一行は、天峰閣で正式参拝を行い、髙橋秀明議長が代表で玉串を奉奠した。田澤清喜教主があいさつ。歓迎の言葉を述べた後、「先代（田澤豊弘師）から（他宗教の）先生方に育ててもらいなさい。それが宗教協力の場だと教えられました。私にとって新宗連を通して頂いたご縁は宝物です」と語った。

この後、教団職員の案内で聖地を視察。教祖の修行時代を偲ばせる歴史ある建物や、昨年の立教百年に向けて整備された立派な建物に感嘆の声が上がった。各所で丁寧な説明を受け、参加者から熱心な質問が相次いだ。続いて、不動滝で水行を体験。この日は好天に恵まれ、水量も少なかったが、水の冷たさと滝の勢いに、参加者は行の厳しさを体感した。

教団職員の説明を受け視察

小憩の後、大神殿・神集閣で松緑神道大和山の教団史を学んだ。夕拝と夕食の後、一日を振り返りながら、懇談を深めた。都心の加盟教団の参加者が多いため、豊かな自然に囲まれた地が発祥の教団に参加者は興味を惹かれたようだった。

翌朝、朝拝に参列し、朝食の後、帰途に就いた。

【諸会議　報告】

第31回教団人セミナーの開催に向け、概要案まとめる
企画委

新宗連企画委員会（企画委、田澤清喜委員長）は9月12日午後1時半から、東京・代々木の妙智會教団本部で第30期第5回企画委員会を開催した。

諸報告の後、教化活動懇談会の全国展開について意見交換を行い、10月8日に開催する理事会において、同懇談会を実施した総支部・協議会に報告をしてもらい、今後の展開を理事に検討してもらうことを申し合わせた。

続いて、制作中の新生復興祈念集会記録集の内容やレイアウト等について検討を行った後、第31回教団人セミナーについて意見交換を行い、挙げられた意見をもとに概要案を作成し、常務理事会・理事会に提案することを申し合わせた。

新宗連会館の第3次大規模改修工事などについて協議
会計委

新宗連会計委員会（中村憲一郎委員長）は9月11日午後2時から、東京都杉並区の立正佼成会法輪閣で第30期第6回会計委員会を開催した。

8月19日より工事が開始された第3次大規模改修工事について協議、また将来構想検討プロジェクト報告書の内容などについて確認した。

新宗連 青年会

ユースフォーラムin大分

「知る」ことの大切さ学ぶ
曹洞宗寺院で研修、イスラーム講義も
青九連

新日本宗教青年会九州連盟（青九連、柴田雅透委員長）は9月14、15日、大分県中津市で「ユースフォーラムin大分」を開催した。同フォーラムは21年前、大分地区委員会から持ち回りで催されてきたもので、今年は「知るって大事！大分から持って帰っちょくれ」をメーンテーマに信仰を持つ青年同志が交流を深め、信仰の素晴らしさや「知る」ことの大切さを学び、今後の実践を考えた。

14日午後1時半、青九連傘下の各地区委員会からの参加者が市内の羅漢山の中腹にある曹洞宗羅漢寺に集合し、開会式。羅漢寺の太田英華（えいか）住職から坐禅の作法のレクチャーを受けた。参加者は、座布の使い方や叉手（しゃしゅ）（立っている時や歩く時の手の作法）、「調身・調息・調心」の考え方を習った上で本堂へ入り、約30分間の坐禅に取り組んだ。

羅漢寺の太田住職の講話に聞き入る参加者

この後、参加者は苦しみや悩みごと、嫌なことを紙に書き、「地獄箱」に投げ捨てた後、回廊を上がり、一人ひとり阿弥陀如来像前の鐘に向かって合掌礼拝し、心を落ち着かせて鐘を打ち鳴らした。

坐禅を終え、本堂に戻り、太田住職が講話。日頃の喧騒を離れて自分を見つめることの大切さを説き、「とにかくこういう時間を大事にしてほしい」と語った上で、毎日を丁寧に生きれば、自分を見つめ、磨くことができ、「自分さえその気になれば坐禅はいつでもできます」と語った。

また、太田住職が羅漢寺27世住職の娘として生まれ、葛藤を抱えながらも40歳までフラメンコダンサーとして活動していたが、ある時東京の生活にピリオドを打ち、華やかな生活から必要最低限の修行生活に入った自身の体験を語った。

太田住職は師匠である青山俊董師との会話から、「お坊さんが嫌いだったのは、嫌なことばかり見てしまう自分が嫌だった」ことに気付き、人間は完璧ではないが、最後で完璧な自分になればよいと思ったという。

そして「宗教家は職業ではなく、生き方」であり、お寺に祀られている仏はその時の自分の心の表れで、「自分を見つめるために、お寺へ」と語った。

宗教には寛容ですが、他宗教への理解が不足しています」と指摘し、立命館アジア太平洋大学の留学生によって別府市の30人に1人が移動し、参拝した後、住職の自覚大道氏が講話を行った。

自覚住職は「（日本は）学校」に移動し、夕食懇談会で交流を深めた。

15日は、曹洞宗善隆寺に

宿泊施設「やかた田舎の

てみてほしい」と述べた。

で仏とじっくりと向き合っ

分を見つめるために、お寺

時の自分の心の表れで、「自

寺に祀られている仏はその

はなく、生き方」であり、お

太田住職は師匠である青山

俊董師との会話から、「お

坊さんが嫌いだったのは、

嫌なことばかり見てしまう

自分が嫌だった」ことに気

付き、人間は完璧ではない

が、最後で完璧な自分になれ

ればよいと思ったという。

そして「宗教家は職業で

はなく、生き方」であり、お

寺に祀られている仏はその

時の自分の心の表れで、「自

分を見つめるために、お寺へ」

と語った。

宗教には寛容ですが、他宗

教への理解が不足しています」

と指摘し、立命館アジア

太平洋大学の留学生によ

って別府市の30人に1人が

移動し、参拝した後、住職

の自覚大道氏が講話を行っ

た。

自覚住職は「（日本は）

学校」に移動し、夕食懇談

会で交流を深めた。

15日は、曹洞宗善隆寺に

宿泊施設「やかた田舎の

家」に移動し、夕食懇談

会で交流を深めた。

15日は、曹洞宗善隆寺に

移動し、参拝した後、住職

の自覚大道氏が講話を行っ

た。

自覚住職は「（日本は）

宗教への理解が不足しています」と指摘し、立命館アジア太平洋大学の留学生によって別府市の30人に1人が

日本駆け込み寺

玄秀盛氏が「人助け」を語る
青中国連　平和学習会

新日本宗教青年会中国連盟（青中国連）は9月8日午後1時から、鳥取県松江市の立正佼成会松江教会で、公益社団法人・日本駆け込み寺代表の玄秀盛氏を講師に招き、「人生は変わる―今私たちにできることから」をテーマに平和学習会を開催した。

玄氏は親代わりの大人にたらい回しにされる幼少期を経て半グレになり、中学校卒業後は「金儲けだけの人生」と本人が振り返るほど、壮絶な前半生を過ごした。そんな中、1990（平成2）年に、天台宗の酒井雄哉大阿闍梨のもとで得度、自身の病気などがきっかけとなって、2002（平成18）年から東京・新宿歌舞伎町で、悩み苦しむ人々の相談にあたってきた。

事例を示し、人助けや問題解決の心構えを語る玄氏

講演では、豊富な相談事例から、現代社会の縮図のような問題状況の最前線と、問題解決の心構え、テクニックなどを紹介。「相談にあたる時、自分も試されている」と語り、「相手を信じきり、丸飲みし（すべて受け止め）、たとえ裏切られても恨まない」と自身のスタンスを語った。

玄氏は前半生で、金に人一倍執着したり、犯罪のグレーゾーンのような商売で他人を不幸にした経験を振り返り、「人に騙されたり、裏切られても、これでバランスがとれる」とポジティブに捉えているという。そして「どんな人でも、生き直しができるが、それは信じることから始まる」と、自らの人生も重ねながら、人助けをしている。

講演の後半には、参加者からの質問に答える形で、自らの考えを披歴。参加者は、玄氏の強烈な個性や信念に圧倒されながら、生々しい話に聞き入り、時に笑いが起こったり、うなずく様子が見られた。

最後に玄氏は「人助けをずっと一生懸命行ってきたのは宗教者」と敬意を表しながら、共に世のため人のために協力して取り組んでいきたいと抱負を語った。

お互いの教団を学び合う研修会
埼玉県委員会

新宗連青年会埼玉県委員会は9月15日午後1時から、東京・代々木の新宗連会館で「『Next Stage』～興味から共鳴へ。教学から協力へ」をテーマに研修会を開催した。自教団についてあらためて学び、他教団への理解を深め、平和とは何か、宗教者として何ができるかをともに考えるとの趣旨。

開会あいさつの後、4教団の参加者が自教団の概要や教義などについて紹介。物語風のもの、聖地の写真、体験談を織り交ぜるなど、工夫を凝らしてわかりやすく説明した。質疑では、即答できない場面もあったが、各教団で似ているところ、異なるところを興味深く学び合った。

自教団の概要、教義を説明

この後、ワークシートを活用しながら、「信仰心を広めていくためにどうしたらよいか」についてディスカッション。自らが周りの人々に良い影響を与え、あこがれられるような信仰者になっていくことが大切という意見が出された。

最後に埼玉県協議会の青年担当委員の斉藤幸靖氏が総括。「信仰心を広めるためには、まず広めようと思うこと、そして自信をもって伝えていくことが大切。自分の信仰を高めていくことはもちろんだが、上には上があるので、自分はまだまだと思ってしまうと、いつまでも人に伝えられない」とアドバイスした。

宗教・研究者エコイニシアティブ

第10回シンポを開催
環境と気候の非常事態と対応訴える

宗教者と環境学・宗教学などの研究者が相互に協力・連携して環境危機を克服する活動を行っている「宗教・研究者エコイニシアティブ（RSE）」（会長＝竹村牧男・東洋大学学長）は9月7日午後2時から、東京都文京区の東洋大学で「第10回宗教と環境シンポジウム」を開催した。

はじめに竹村牧男会長が開催趣旨を述べ、基調講演を上智大学神学部准教授の吉川まみ氏が「SDGsにおける環境問題への取組と宗教の視点」のテーマで行った。吉川氏は、フランシスコ教皇が2015（平成27）年5月に発表した回勅『ラウダート・シ』から、環境問題に関する部分を解説。教皇は、環境問題が社会問題であり、脆弱な自然と貧しい人々とのつながりを強調。キリスト教の立場から環境問題に取り組むことの信仰上の意味などを説いたことを明かした。

パネル発表では、東京大学名誉教授でRSE副代表の山本良一氏が世界の深刻な異常気象の多発や、CO2を海洋が大量に吸収しているため海洋の酸性化が急速に進行しているなど、環境と気候の深刻な危機と、世界各国の対応について解説。日本の対応の鈍さに「日本の政治家は何をやっているのか」と憤りを表した。

シンポは、東洋大学生命科学部教授の柏田祥策氏の海洋プラスチック汚染と対策に関するパネル発表（代理報告）に続き、宗教者からの生活実践の報告として、金光教「環境と倫理」研究会代表の松本光明氏と、立正佼成会中央学術研究所研究員の深田伊佐夫氏が自教団の自然、環境に関する教義と具体的な環境問題への取り組みを発表した。

この後、基調講演者と発表者、報告者を交えての質疑応答が行われ、最後に山本副代表がRSE名による「環境と気候の非常事態宣言」を発表した。

同宣言では、海洋プラスチックや生物の絶滅危機、人口の増加、気候変動抑制に関する「パリ協定」が定めた世界の平均気温上昇目標1・5度を2030年には超えるなどの諸報告書を挙げ、環境と気候の非常事態に直面して問題解決のための政治的な取り組みの遅れを懸念。

また今年5月、世界の青少年による気候ストライキ、フランスシスコ教皇も気候の非常事態に言及し、世界19カ国・850を超える自治体が環境と気候に関する非常事態宣言を行っていることも示した。

これらの状況を踏まえ、RSEとして、地球環境が非常事態にあることとその対応を宗教界や学会はもとより市民、政府に訴え、少欲知足の心とエシカル（倫理的）消費による自然と調和した文明への転換を提唱し、実践に努めていくことを宣言した。

平和活動の原点―大和山チャリティーバザー

五所川原市で45回目迎える

笑顔と感謝で取り組み　松緑神道大和山

松緑神道大和山（本部＝青森県平内町、田澤清喜教主）が、世界平和への実践活動として毎年秋に実施している「大和山チャリティーバザー」が、8月25日の青森県五所川原市での開催から幕を開けた。

同バザーは、田澤康三郎初代教主が1974（昭和49）年、ベルギー・ルーベンでの第2回世界宗教者平和会議（WCRPⅡ）で実践活動の必要性を確信したことが発端。帰国後、「いつでも・どこでも・だれでも・いつまでも」をスローガンとした「一食を捧げ欲を節する運動（平和一食運動）」を提唱した。その実践活動として翌年9月、第1回チャリティーバザーを五所川原市で開催。その後、北海道や宮城県などに広がり、今日では東北、北海道の12会場で催されるようになり、チャリティーイベントとして地元に定着している。

五所川原市でのバザーは今年で第45回を数える。昨年に引き続き「オルテンシア」（ふるさと交流圏民センター）前広場で催され、今回はオルテンシア内にも出店が設けられた。

晴天に恵まれ、早朝から多くの市民が会場に参集したなか、午前8時半から開会式を行った。鈴木武幸代表総務があいさつに立ち、「平和活動は46年目を迎え、バザーはその活動の実践の原点」と平和一食運動の理念について説明。「多くのことを実践し、その輪を広げていくことが世界平和につながります」と述べた。

また地元をはじめ北海道、東北、中部、関西からの出店があったことも報告し、スタッフらに「世界平和を願い、皆さん、笑顔と感謝の心で取り組みましょう」と呼び掛けた。

続いて来賓紹介が行われ、青森県知事の三村申吾氏夫人の三村三千代氏と五所川原市長の佐々木孝昌氏、五所川原市社会福祉協議会会長の角田昭次氏、青森放送事業局長の杉下顕司氏が紹介され、三村氏と佐々木市長があいさつ。それぞれ長年継続されてきたバザーと、松緑神道大和山の平和活動を称えた。この後、鈴木代表総務から五所川原市社会福祉協議会への寄付金贈呈、一同で聖歌「世界平和祈願の日の歌」を斉唱した。

午前9時、販売開始を告げる花火が打ち上げられると、市民らは競うように入場し、農産品や海産物などの人気の出店テント前には行列ができた。午前7時から開場を待っていたという五所川原市内の男性は「毎年、バザーを楽しみにしている。45年間、休まずに続けてきたのは大した（立派な）ものだ。私らが物品を買うことで、少しでも世の中のためになるならば、ありがたいこと」と話した。

今年も国際連合世界食糧計画（WFP）と認定NPO法人テラ・ルネッサンスのブースが設けられ、活動PR、募金を呼び掛けた。バザーに寄せられた浄財は、WFP及びテラ・ルネッサンス、地元の社会福祉協議会などを通し国内外の平和活動に役立てられる。

農産品など人気の出店テナント前には行列ができた

11月3日まで東北、北海道の12会場で開催

同バザーは五所川原市での開催以降、9月は14日に青森市、28日に帯広市、29日に宮城県松島町と札幌市。10月は13日に青森県平内町と北海道北見及び釧路市、14日に室蘭市、20日に盛岡市と仙台市。そして11月3日の宮城県大崎市での開催と全12会場で開催される。

教祖の理念を再確認

教祖ご昇天36年祭　第34回合祀敬霊祭　修養団捧誠会

修養団捧誠会（本部＝東京・池袋、出居徳久総裁）は8月25日正午から、静岡県沼津市の悠久世界平和郷で「教祖ご昇天36年祭並びに第34回合祀敬霊祭」を執り行った。

出居徳久総裁が万霊万物尊愛堂で「いのりのことば」を奏上した後、会員が参集した御霊所へ入場し開式。一同で「礼法」を行った後、出居総裁が出居清太郎教祖と出居菊の会母の坐像前に進み「教祖礼拝の詞」を奏上した。続いて教団役員と来賓、合祀申込者代表が玉串奉奠を行った。

続いて、1981（昭和56）年12月19日の「教祖おことば」（録音）拝聴、「教祖讃歌」斉唱の後、早山徹会長があいさつ。教祖が悠久世界平和郷に込めた理念を再確認し、その実現のための計画を披露した。また、計画を遂行するための環境整備に取り組むとともに、会員への協力を呼び掛けた。

出居総裁はあいさつで万霊万物尊愛の趣旨を説明

この後、「合祀の儀」が執り行われた。小松秀憲教学院長が功労者・支部関係者41人の合祀者氏名を奉読し、奉祀申込者の献花が行われた。木島正孝事務局長を先導に祭典係2人が芳名箱を奉持し、御霊所から敬霊塔に向かい、塔の地下に丁重に納めた。出居総裁が御霊所外回廊から敬霊塔に向かい「いのりのことば」を奏上、合祀申込者代表あいさつが行われた。

電報披露の後、出居総裁があいさつ。「万霊万物尊愛の趣旨は悠久なる時の流れの中で、私たち一人ひとりが生かされ生きているということへの感謝です。今、この一瞬を生かされ生きていることを感じてください」と述べた。さらに「実り多き明るい日々を、すべての人々の平和と幸せを祈りつつ、共に一歩ずつ歩ませていただきましょう」と説いた。

直会の後、参列者一人ひとりが順次、教祖と会母の坐像に拝霊を行い、式典を終了した。

社務所増改築を奉告

例大祭を斎行　日本神宮本庁

日本神宮本庁（中島秀典管長）は9月14、15日、北海道帯広市の本宮・帯廣明神大社で「令和元年度例大祭」を斎行した。今回の例大祭は、今年8月に増改築した社務所の竣工奉告祭と併せて行われた。

14日午後6時から宵宮祭が執り行われ、15日は午前11時から本祭典が斎行された。拝殿に参列者が着席した後、太鼓が打ち鳴らされ開式。祭員によって開式が告げられ、修祓、開扉の儀が厳かに行われた。

斎主の中島秀典管長が神前に進み、「大祭祝詞」を奏上。その中で社務所増改築が無事、竣工したことを奉告した。続いて斎主が「日本神宮御神文」を奉読。聖なる魂の曇りを取り除き、心素直に我欲や恨みの心を捨て、すべてに感謝し譲り合い、人に尽くす真心が善因善果となり、厄災を取り除き、氏子・崇敬者は健康、一家繁盛をいただけるなど、教えを説いた「神文」を読み上げ、参列者らは頭（こうべ）を垂れ拝聴した。

この後、斎主が玉串を奉奠した後、役員と来賓、参列者ら一人ひとりが神前に進み玉串を奉げた。

小憩の後、新装なった社務所内の大広間で祭典直会を催した。はじめに中島管長があいさつ。今年8月に社務所の増改築を終えたことをあらためて報告し、「皆様のご協力を得て、無事竣工できました」と氏子崇敬者への謝辞を述べた。

恒例の秋鮭鍋が振舞われるなか、奉納芸能では日舞やよさこいソーラン、大正琴の演奏が行われ、またカラオケ大会も催され、賑わいをみせた。

中島管長が「大祭祝詞」を奏上。社務所増改築の竣工を奉告した

祈願込め護摩木を炎へ

大護摩祭を斎行　大三輪教

大三輪教（迫泓管長）は8月25日午後1時から、奈良県桜井市の本部・本院で「大護摩祭」を斎行した。

太鼓が鳴る中、迫吉晴斎主をはじめ斎員が本部神前に入座。修祓の後、斎主が「開式之詞」を奏上。参列者全員で「大祓之詞」を奏上。そして斎主と各団体代表者、一般参列者の順で「玉串奉奠」を行った。

斎主と3人の斎員らが、境内中央の護摩壇前へ移動し、斎員らが「大護摩祝詞」を奏上した。

この後、2人の斎員が本院神前に設けられた灯明を竹の先に採火し、護摩壇に点火した。

白衣を纏った斎員らが「病気平癒」「家内安全」「交通安全」などの祈願が書かれた護摩木を手に、一本一本に九字を切り、護摩壇の燃え盛る炎の中に投入した。参列者はこの護摩壇を囲み、一心に「般若心経」を唱えた。

護摩木が燃え尽きた後、「火渡りの行」へ移った。護摩壇を解き、護摩木の炭を広げ、塩で清め、檜の青葉を敷いた。白煙が立ち昇るその上を、信者は合掌しながら心願成就を願い裸足で歩いた。

心願成就を願い「火渡りの行」を行う信者ら

WCRP／RfP

第10回世界大会報告

ドイツ・リンダウ

8月20から23日までドイツ・リンダウで開催された第10回世界宗教者平和会議（WCRP／RfP）は初日（20日）午前、国際会議場で開会式。子どもたちによる諸宗教の祈り、ドイツの宗教指導者の歓迎あいさつの後、国際共同議長の庭野光祥氏とジョン・オナイエケン氏（カトリック）があいさつ。

庭野氏は、祖父の庭野日敬師はじめWCRP創設メンバーらの宗教の対話と協力による世界平和への強い信念と決意に触れた後、半世紀を経て「分断」が進む現代を憂い、「対話のオペレーション・システムをグレードアップしなければなりません」と、相手の話に耳を傾け共感することがケアの本質であると訴えた。

開会式でスピーチを述べる庭野光祥共同議長（20日）

続いてドイツのフランク＝ヴァルター・シュタインマイヤー大統領がスピーチを行い、「宗教は戦争を正当化するものであってはならない。宗教は平和に対して尽くすべき」と述べた。また、SDGsに宗教者の取り組みを求めた。

21日午後には、国際会議場近くのルイトポルト公園まで平和行進を行い、式典を催した。公園内には大会に合わせ制作された、宗教間対話の永久的象徴を表現した木製の「リング・フォー・ピース（平和のための輪）」を設置、市民らと共に平和の祈りを捧げた。

今大会で目立ったのは女性の活躍で、19日の女性事前会議では活発な議論が交わされ、また21日の大会特別セッション「平和推進者としての中東・北アフリカ地域の女性」では、登壇者すべてが女性。チュニジアとイラク、エジプト、バーレーンで活躍する女性リーダーが、公正な市民権の確立や少数派の保護、人種差別の禁止など、各自が取り組んでいる民主化社会変革の活動を報告した。

宗教間対話の永久的象徴「リング・フォー・ピース」（写真上）のもと、市民も参加し平和の式典を行った（21日、ルイトポルト公園）

◎日本代表団、参加者

日本からは約40人が参加。WCRP日本委員会からの代表団の主な参加者は次の通り。カッコ内はWCRP国際委員会・日本委員会、教団の役職。敬称略。

【評議員】庭野日鑛（国際名誉会長、立正佼成会会長）、深田充啓（円応教教主）、三宅光雄（金光教泉尾教会教会長）、宮本惠司（国際トラスティ、妙智會教団法嗣）、渡部信（日本キリスト教協議会議長）

【理　事】植松誠（日本聖公会首座主教）、黒住宗道（黒住教教主）、川端健之（国際トラスティ、立正佼成会理事長）、庭野光祥（国際共同議長、和解の教育タスクフォース－TF－運営委員、立正佼成会次代会長）、三宅善信（核兵器禁止条約批准TF運営委員、金光教泉尾教会総長）

【特別会員】根本信博（RfP Asia／ACRP事務総長、難民問題TF運営委員、立正佼成会時務部秘書グループ主席）

【事務局長】國冨敬二

【女性部会】森脇友紀子（アジア女性ネットワーク事務局長、カトリック東京大司教区アレルヤ会会長）、松井ケティ（和解の教育TF運営委員、清泉女子大学教授）

【青年部会】大西英玄（核兵器禁止条約批准TFメンバー、音羽山清水寺執事補）、齋藤侑助（立正佼成会習学部青年ネットワークグループ）

全体会議に出席した日本の宗教者ら。写真左から三宅氏、深田氏夫妻、森脇氏、松井氏

初の女性事務総長が就任

閉会式―国際委員会の人事を発表

最終日23日、閉会式では正式代表により、大会宣言文「リンダウ宣言」が採択された。国際委員会の人事発表では、初の女性事務総長として、アッザ・カラム氏（イスラーム）が就任。カラム氏はカイロ生まれのオランダ人科学者。国連人口基金（UNFPA）に勤務し、国連宗教・開発タスクフォースコーディネーターを務めている。

ウィリアム・ベンドレイ前事務総長から、RfP旗を受け取ったカラム氏は就任あいさつで、三つの柱（共感・慈悲・愛）と五つの課題（貧困問題・気候変動・ジェンダー問題・平和構築・教育）を提示した。

新事務総長として抱負を述べるカラム氏（中央、23日閉会式）

人事では、庭野日鑛国際名誉委員長、庭野光祥国際共同議長が再任。新たに浄土真宗本願寺派前門でWCRP日本委員会顧問の大谷光真氏が国際名誉会長に選任された。

大会を終えて、植松誠WCRP日本委員会理事長は談話を発表し、「第10回大会では、WCRPの創設者たちの願いであった、世界中の宗教者が主体的にネットワークを築き、実際に平和のための共通行動を行える組織になったという実感を持った」と振り返った。

そしてWCRP活動で中心的な役割を果たし、存在感を放ってきた日本委員会が、今大会で存在感が減少したように見えたことについては、「世界の幅広い宗教者が主体性を発揮し、自らがWCRP活動を引っ張っていくという運営ができるようになったことは、WCRPの創設者の真の願いであった」と述べた。

さらに大会に向け作成した日本委員会の提言文の内容が「リンダウ宣言」で謳われたことから、「着実に実行に移すことが、今後の日本委員会の大きな使命と役割になっていくと思う」と抱負を語った。（写真提供／WCRP日本委員会）

閉会式で採択された大会宣言文「リンダウ宣言」は、前文でWCRP／RfPが「49年間、平和構築と支援を必要とする人々のために声をあげることを決意し、取り組んできたことを誇りに思う」「われわれは、慈しみの、思いやりの、そして愛の同盟」と意義付けた。

続いて現状を7千万人以上の人々が難民や国内避難民となり、核兵器の近代化、新たなエネルギー兵器が作られ、新たな軍拡競争に突入していること、さらに悪化する地球温暖化、熱帯雨林の破壊、海洋汚染の深刻さを訴える。

また、一握りの最富裕層が、最下層の40億人よりも多くの富を保有していることや「フェイク（偽）ニュース」が政治的・商業的利益に合わせる一方、「真実」の概念に挑戦する真の「枠組みを超えた危機」が存在し、不都合な真実と都合のよい偽造との間で揺れ動いていることなどを指摘した。

この前文に続き、大会テーマ「慈しみの実践：共通の未来のために―つながりあういのち」についてあらためて説明し、大会を通して議論した主張や取り組み、要請を、暴力の防止と変容、公正で調和のある社会の促進、持続可能で不可欠な人間開発と地球保護、共なる行動への呼びかけ―の4項目で示した。そして最後に「共通の行動への呼びかけ」として、以下9項目を挙げた。

リンダウ宣言　要旨

①経済平和機構との連携のもと積極的平和のための教材やワークショップを開発する。

②紛争予防と変容、女性への暴力の問題に対し、女性が積極的な役割を果たすためのツールやトレーニングを開発する。

③宗教伝統の間に起きた事例を含め、過去の痛みを認識し、赦しと和解に向けた行動を促進する。

④難民や移民となった人々の福祉に向けて活動し、介助と支援のプログラムを開発する。

⑤宗教コミュニティにSDGs達成に向けて資源を投資することを求める。

⑥諸宗教熱帯雨林イニシアチブと協力して、森林破壊に関する公共の意識を高め、気候変動に対処し、地球保護政策を提唱する。

⑦「赦しと和解の平和憲章」にあるように、和解は個人の関係のみならずコミュニティ間、国家間においても積極的平和の極めて重要な側面であるととらえ推進していく。

⑧「核兵器廃絶のための国際キャンペーン」を全面的に支援するパートナーになることを確約する。

⑨さまざまな宗教伝統や受け継がれてきた倫理によって幅広く共有されている「徳」に関する言明に立脚し「徳の連帯」を構築する。

ロボット学から問う人間・宗教

「宗教と科学の新たな世界」テーマに公開シンポジウム　日本宗教学会第78回学術大会

日本宗教学会（山中弘会長）は9月13から15日まで、東京都足立区の帝京科学大学で、第78回学術大会を開催した。

13日は「宗教と科学の新たな世界」をテーマに公開シンポジウム。開催校の創立30周年記念事業の後援も受けた企画で、ロボット学で世界的に著名な大阪大学教授の石黒浩氏が基調講演を行った。

ロボットの研究開発は従来、工場などで特定の作業を行う産業用ロボットが中心だった。石黒氏は2000（平成12）年頃から、日常生活において、人と関わりながら活動し、介護、教育など様々なサービスを提供するロボットの研究開発に先進的に取り組んできた。

石黒氏は「早ければ5年、遅くとも10年以内にロボットは社会に普及する」と述べ、日常活動型のロボットの研究開発は、単にロボットの開発であるだけでなく、人間の性質、人の存在とは何かを明らかにしていくものであると説明した。

例えばアンドロイド（人型ロボット）は、すでに十分な存在感があるが、場合によっては本物の人間以上のこともある。その場合は、中身が動物なのか機械かということよりも、見かけや動きのリアリティが重要になっている。

石黒氏は京都のある寺との共同開発で「アンドロイド観音」を作製した。仏像の造形は一般的にあえて性別、年齢がわからないようにし、人の想像力を掻き立てる特徴があり、アンドロイド観音もその特徴をそなえ、さらに機械むき出しの造形となっている。それでも人はその面前で涙することもあるという。

石黒氏によれば、そもそも人間は、動物に「技術」を加えたもので、これまでの人間の発達を「人間の動物的部分が（スマートホン、車のように）技術に置き換わってきた」と説明。

数万年先のこととしながら、「人間はいずれロボットになる」「人間は無機物から生まれて有機物となったが、また無機物に戻ろうとしている」などと表現した。そして人とロボットが共生する社会では、両者の境界がなくなり、そこで人間らしさは、（ロボットのように）何かのために思考するのではなく、「純粋な思考（思考のための思考）が重要になってくるのではないか」と述べた。

この後、宗教学者と哲学者からのコメントを受けディスカッション。見かけが人間らしいことと、人間そのものであることが、同じと言えるのか、また宗教に特有の祈りが、未来にどう変化していくかなど、活発な議論が展開された。

14、15日には個人発表とパネル発表が行われた。國學院大學教授の石井研一氏は、日本人の宗教団体に関する世論調査について発表。ここ20年間で新宗教について、マイナスイメージは薄れているが、それは宗教団体についての関わりや理解が深まったというわけではなく、無関心によるのではないかと推定した。

また、京都府立大学准教授の川瀬貴也氏は、沖縄における戦没者慰霊についての発表で、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）の沖縄慰霊平和使節団について紹介し、宗派を超えた活動、加害者性の自覚、「信教の自由」などの特徴を指摘した。

ロボット学で著名な石黒氏が講演（13日）

寄稿

私たちの苦悩　作家たちはどう向き合っているか

内藤　麻里子（文芸ジャーナリスト）

昨今、私たちの周囲にはいじめや高齢者問題から非正規雇用、LGBT（性的少数者など）まで苦痛に満ちた声があふれている。そんな現代に生きる人間の姿を描いた小説はどんなものがあるのか。作家たちは私たちの苦悩にどう向き合っているのか。幾ばくか紹介したら、現代を見るよすがになるだろうか。極力新しい作品を選んでみた。

平岡陽明さんの『ロス男』（講談社・10月8日発売）は、ロストジェネレーション世代の40歳のフリーライターが主人公。彼らはバブル崩壊後の就職氷河期に社会に出た世代で、非正規雇用でしか職を得られず低賃金にあえぐ者が多い。主人公もそうした一人で、「そろそろ本当の自分の人生を起動したい」と思っている。一昔前にはやった「自分探し」のような心理状況といえようか。この処方箋は「そうした自分をまるごと愛せるかどうか」であると作家は喝破して、「愛」をキーワードに軽妙な物語に仕立てている。

一方で、愛があらゆる不幸の源であるとしたのが天童荒太さんの『ペインレス』（2018年・新潮社）である。この世は「痛み」に支配されているという発想から物語を構築した。「痛みを受けた経験や、痛みを受ける恐れから、差別や、殺人や、紛争」が生じるというわけだ。痛みの本質には愛がある。愛があるなら幸せになれそうなのに我々はそうでもなく、平穏でもない。そこで、心に痛みを感じない女医を登場させて、人間存在というものの可能性を問う思考実験をしている。

一人暮らしの老人の思考を丁寧に追ったのが、若竹千佐子さんの『おらおらでひとりいぐも』（河出書房新社）。18年の芥川賞受賞作だ。70過ぎの女の独白が続く。捨てた故郷、疎遠な子どもたち、亡き夫のことで悲しみや愛、孤独が身中から湧き上がる。これを方言で語っていくところに味もある。そしてたどり着いたのは原風景である故郷の山。神でも仏でもない、揺るぎない山の存在感が、自由と覚悟を彼女に与えていくことになる。

オウム真理教の事件から想を得たのが、中村文則さんの『教団X』（14年・集英社）だ。ここで面白いのはカルト教団を描いた部分ではなく、教祖が一時在籍していたグループの方だ。宗教団体ではなく、「神はいるのか？」という問いを考える会という設定で、中心人物に最新の物理学、生物学、宇宙科学の観点から人間や仏教を語らせている内容が刺激的だ。若い作家の挑戦的作品といえる。

貧困、虐待にさらされ街でさまよう少女を描いた桐野夏生さんの『路上のX』（18年・朝日新聞出版）、SNSに囲まれた現代の就活事情とその本音に迫る朝井リョウさんの『何者』（12年・新潮社）などからは、状況が変わらない終わりなき日常を送らなければならない若者が浮かび上がり底冷えがする。

本屋大賞を受賞した辻村深月さんの『かがみの孤城』（17年・ポプラ社）は、不登校の中学生の物語。鏡が光って不思議な城に導かれるファンタジーだが、今の世界がすべてではなくあなたの近くに手を引いてくれる誰かがいる、別の世界への扉があることを知ってほしいという祈りにも似た思いが込められている。

紹介したい本はまだまだあるが、紙幅が尽きたのが残念だ。どれでもいい、是非手に取っていただければ幸いだ。

多様な苦悩を抱え人々は日々を過ごしている

内藤　麻里子（ないとう・まりこ）
1959年長野県生まれ。慶応大学法学部卒。87年毎日新聞社入社。宇都宮支局、地方部地方版編集を経て92年から学芸部。書評面、宗教面、日曜版担当などを経て2000年から文芸を担当。エンターテインメント小説を中心に取材を続ける。2019年7月、退社。現在は文芸ジャーナリストとして活動。

—第54回教誨師中央研修会—

功労者に表彰状を手交

全国教誨師連盟

全国教誨師連盟（大谷光敦総裁、舎奈田経夫理事長）は「第54回教誨師中央研修会」を9月3から5日まで、東京・霞が関の法務省で開催した。今回の研修会は教誨師に委嘱され、おおむね5年未満の教誨師を対象に、「教誨師として何をすべきか」をテーマに開かれた。

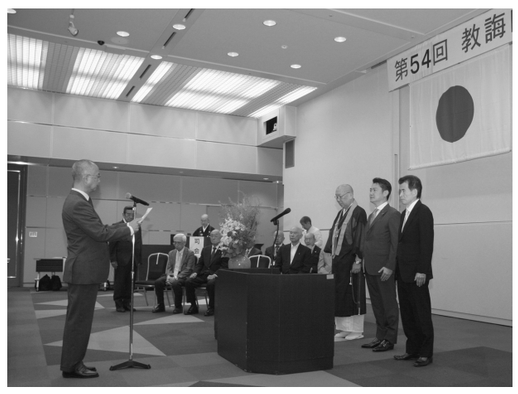
初日午後1時半から、開会式・教誨事業功労者表彰式典が催され、舎奈田経夫理事長の開会あいさつ、物故教誨師の読み上げと黙祷、大谷光敦総裁の式辞（代読）に続き、教誨事業功労者の表彰が行われた。

法務大臣、日本宗教連盟（日宗連）理事長、全国教誨師連盟総裁による各表彰が行われ、各表彰代表に山下貴司法務大臣と岡田光央日宗連理事長、舎奈田理事長（総裁代理）から表彰状が手渡された。

この後、全64人の表彰者を代表し、名古屋拘置所所属教誨師の加藤通幸氏（日蓮宗僧侶）が、山下法務大臣と岡田理事長、舎奈田理事長に向かい、謝辞を述べた。

祝辞を山下大臣と岡田理事長、藤本哲也矯正協会会長が述べ、教誨活動の重要性や教誨師への期待を述べた。その中で岡田理事長は、「宗教各派の教義や理念に基づき、被収容者一人ひとりの心を理解し、慈悲の光を与え、その徳聖を涵養し働きかけることで、改善更生を促す『宗教教誨活動』の奉仕精神は真に尊い」と称えた。

研修会では同日午後から5日夕方まで、基調講演と講義、班別討議などが行われ、矯正行政の施策や施設の収容動向、教誨師としての基本的情報や知識、技術などの向上を図るための研鑽に努めた。



表彰者代表の加藤氏㊧が謝辞（右から岡田理事長、山下大臣、舎奈田理事長）

茨城県で諸宗教者が集い　学習交流会

相互理解と交流図る

日本全国には宗教協力・宗教間対話を行う組織は多数存在しているが、このほど茨城県では新宗連茨城県協議会（矢部光男議長）が主催となり、茨城県の諸宗教者（神道・仏教）が集まり、「茨城県宗教者学習交流会」を開催。9月3日午前10時半から、茨城県水戸市の立正校成会水戸教会で初の交流会が行われた。

同会は目的に、①現代社会が抱える諸課題に対して、宗教者の果たす役割を探る②郷土茨城や日本の魅力を見つめ直し、人々の善意を結ぶ③茨城県宗教界参加者による親睦の機会を設け、相互理解とゆるやかな交流を図る—との3点を掲げ開催された。

「祈り」による開式の後、同会の実行委員長を務める矢部光男議長があいさつ。新宗連による宗教協力が「人に安心を与える慈愛の一点で結ばれている」と紹介。その上で同会は「茨城県内の宗教者と交流させていただきたい」との思いから発足したことを話し、「ゆるやかな交流」を目指すとしながら、現代社会の諸課題に対して「（諸宗教間の）交流を通して解決へのヒントを得るなど、いろいろなことができる」と展望を述べた。

大井川和彦茨城県知事のあいさつ（代読）の後、東洋大学学長の竹村牧男氏が登壇し、「現代社会における『共生』の視点と宗教の課題」をテーマに講演を行った。

竹村氏は、グローバル化した現代社会において「共生」が課題となっていると述べ、特に異文化を理解し、良さを引き出し合う「異文化理解活用力」が重要視されていることを指摘。さらに共生のためには自国の文化を深く学び、伝える「自文化理解発信力」もまた重要であると述べた。

浄土宗の僧侶・椎尾弁匡の「ともいき」思想や、専門の仏教学の視点から縁起思想や大乗の理念、仏教哲学者の鈴木大拙の自他観などに触れ、「自他は本質的に平等一如」「互いに関係し合い、支え合っている存在」であると説明し、自分よりも他者を救うことや、他者を人格として尊重していくことなどが共生においては大切であると解説した。

これらを踏まえ、「共生は差異をなくすこと（同化）ではなく、差異を残しつつ互いを生かし合う道」と述べ、茨城で宗教を超えた交流がなされていることに期待を示し、共生など「共通の目的には（諸宗教者は）手を携えてほしい」と述べた。

この後、竹村氏を囲んで交流会が催され、参加者が感想や質問などを述べ合い、懇親を深めた。

仏教学の視点から「共生」を語る竹村氏

第50回部落解放・人権夏期講座

多彩なテーマで学び

高野山大学　約1300人が参加

部落解放・人権夏期講座実行委員会は8月21から23日まで、和歌山県伊都郡高野町の高野山大学で「第50回部落解放・人権夏期講座」を開催し、昨年に引き続き1000人を超える約1300人が参加した。同実行委員会は、部落解放・人権研究所（谷川雅彦所長）が中心となり組織している。

高野山が会場となったのは1971（昭和46）年の第2回目からで、宿坊で大人数を受け入れるノウハウがある高野山真言宗と、涼しい場所で開催したいという主催者の思いが一致して、これまで高野山で開催されてきた。

講座1日目と3日目は、全体講演として、松下講堂黎明館と高野山大学体育館に分かれて2会場で。また2日目は課題別に高野山大学201教室を合わせ、3会場で講演が行われた。

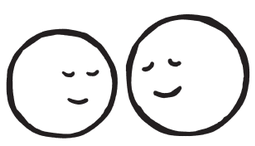
障害者や外国人労働者、パワハラ、沖縄、女性などさまざまなテーマで講演が組まれ、約20講から関心に応じて聴講ができる。また、事前申込制の高野山の歴史を学ぶフィールドワークも人気で、理解を深めるために事前講座も催され、「平等と差別」を中心テーマとした学びを深めた。

また、「『在日』問題入門」講演では、今年4月に改正入管法が施行され、人材不足が深刻な14業種を対象に、一定の技能と日本語能力のある外国人に日本での就労を認め、実質的に移民受け入れに舵が切られたが、移民社会は今に始まることではなく、「在日」の歴史から日本の「外国人」受け入れはどうあるべきかを考えた。

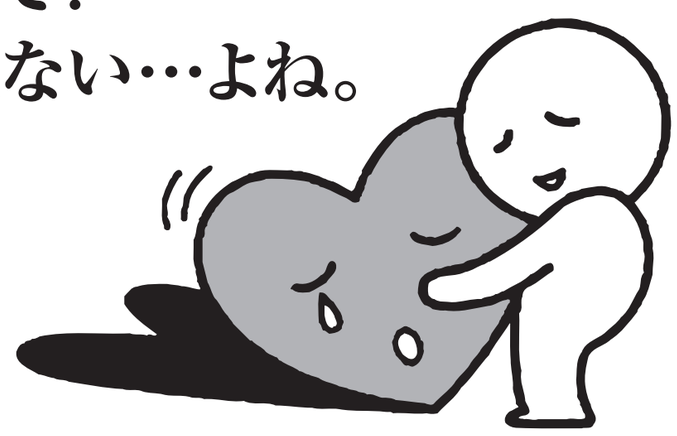
講師を務めたNPO法人多民族共生人権教育センター理事長の朴洋幸氏は、在日コリアンの歴史を踏まえて、「在日コリアンが受けてきた差別や人権侵害を繰り返さない施策や歴史修正主義、差別的な言動に対する対応が必要です」と訴えた。

さまざまなテーマで講演（21日）

ひとりで悩まず電話して！
ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。


●東京自殺防止センターは国際ビフレンダーズの一員です。
●私たちは国際ビフレンダーズ憲章に沿って活動しています。

●必要に応じて面接をしています。
●手紙でのご相談にも応じています。
●秘密は守られます。
●相談は無料です（通話料はかかります）。
●金銭的な援助はできません。
●医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家にお願いします。
●特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。



NPO法人　国際ビフレンダーズ
東京自殺防止センター
03-5286-9090
年中無休、夜8時から翌朝5時30分まで
火曜は夕方5時から翌日2時30分まで
木曜は夜8時から翌日2時30分まで
〒169-0072　東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロアム教会内
事務局電話番号　03-3207-5040（FAX 03-3207-5098）
●全国にある他の自殺防止センター
国際ビフレンダーズ 大阪自殺防止センター
06-6260-4343　毎週金曜、午後1時から日曜、午後10時まで
国際ビフレンダーズ 宮崎自殺防止センター
0985-77-9090　毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から午後11時まで
国際ビフレンダーズ 岩手自殺防止センター
019-621-9090　毎週土曜、午後8時から午前0時まで
国際ビフレンダーズ あいち自殺防止センター
052-870-9090　毎週金曜、午後8時から11時まで